平成23年度マッセ・市民セミナー
（大阪府社会福祉大会）

これまでも、そしてこれからも
ー頑張ろう東北！　支えようみんなでー

日時　平成23年11月25日（金）
会場　大阪国際交流センター　大ホール

対　談

これまでも、そしてこれからも
－頑張ろう東北！　支えようみんなで－

元阪神タイガース　捕手　矢　野　燿　大氏
元関西テレビ　アナウンサー　梅　田　　淳氏

（梅田） 皆さま、こんにちは。ようこそお越しくださいました。あらためてご紹介します。矢野さんに大きな拍手をどうぞよろしくお願い申しあげます。

（矢野） よろしくお願いします。

（梅田） 今、司会者の方からご案内いただいたように、昔を振り返りながら今に至るまで、そして未来へということで、矢野さんを中心にいろいろなお話をしてまいりたいと思います。どうぞ気楽にお付き合いをいただきたいと思います。

（矢野） はい、お願いします。

（梅田） よろしくどうぞ。今日は台本というものを頂いて、「矢野さんにはこういう歴史があったんだな」とあらためていろいろ思い起こしたことがありました。大阪市平野区に生まれて、野球は小学校２年生からですか。

（矢野） そうですね、やっています。

（梅田） それで地元の少年野球チームからスタートして、桜宮高校、４番でキャプテン。

（矢野） そうですね、一応。

（梅田）それでキャッチャー以外、すべてのポジションをこなしたのですってね。

（矢野）足もまあまあ速かったので、高校や大学などいろいろ入るたびにいろいろなポジションをやっていましたね。

（梅田）それで甲子園球場は、高校時代の出場はなかったけれども。

（矢野）全然ないです。全然届かなかったです。

（梅田）しかし、自分自身のレベルは「プロに行けるのではないか」という気配はあったのですか。

（矢野）全くないですね。

（梅田）なかった？

（矢野）はい。高校も、大阪の有名な高校に誘われることも一つもなかったですし、大学球界もどこも誘ってくれるところがなかったので、全然想像していなかったですね。

（梅田）へえ。これは古田敦也さんも同じような話をするのです。全然一流ではなくて、でも今なぜか皆さんの前にいるのですというケースが他にも結構あって。でも、それには秘密があると思うのです。やはり自分自身の中にある生まれ持っての運とか。

（矢野）運はありましたね。

（梅田）やはり。

（矢野）高校も、こちらの方向に行きたいなと思っても行けなくて、違う方向に行っているのですが、結果的に多分そちらの方が良かったのだろうなと

いうことは本当に多いです。

（梅田）なるほど。大学は東北福祉大学という。それで福祉というものを学ばれたのですってね。

（矢野）そうですね。学ぶといっても、野球９割、勉強１割くらいですけれども。

（梅田）では、当時を思い出して、福祉とはどんなことですか。

（矢野）人に何か貢献できるというか。教育というよりは、そういう場にお手伝いで行ったり、そういうことはありましたね。

（梅田）何をおっしゃいますやら。矢野さんはプロ野球現役時代から退かれても、今、福祉ということをやっていらっしゃいます。実際、この話は後ほどまたしますが、誰かのために、人のためにという気持ちが非常にある方なのです。僕はそれを非常に尊敬する部分として持っています。

（矢野）いえいえ、ありがとうございます。

（梅田）でも、東北福祉大学から中日ドラゴンズにまず入団するわけですが、ドラフト２位だったのですかね。

（矢野）そうですね。中日なんか全然行きたくなかったのですけどね。本当に僕らには職業選択の自由はありませんから。この前、菅野君が浪人するということを発表しましたけれども、あそこまでになれば選べるのですが、僕のレベルでは選べなかったので、嫌々怖い監督の星野さんのところに無理やり入れられまして、大変でした。

（梅田）そうですか。でも行きたくなかったドラゴンズ、しかしプロ野球選手として歩み始めて、どうだったですか。

（矢野）結果はやはり、あの土台というか、当時は監督も一番厳しかったですし、練習の量も大変でしたし、いろいろな意味で勝ちにもこだわっていましたし、初めにあそこを経験したので、あとはどの監督が来ても怖くないなというのは、やはり良かったですよね。最初に優しい監督だったり楽なところに行ってしまうと、やはりしんどいと思うのですけれども、そういう意味では良かったです。

（梅田）そうですか。それで97年に阪神タイガースに移籍しましたが、2003年、2005年の優勝は本当に印象に残っています。私も2003年は実況をさせていただきました。

（矢野）ありがとうございます。

（梅田）本当に歓喜の渦に私も一緒に包まれた、興奮した時代がありました。それでやはり、阪神タイガースでの歴史というのは黄金の歴史ですね。

（矢野）そうですね。本当にタイガースでは僕の人生そのものを変えていただいたので、そういう意味では、トレードに出されたときは非常にショックで、とても悲しくて寂しくていろいろなものをやったのですけれども、でも振り返ると本当にトレードが一番僕の人生を変えてくれたものになりましたね。

（梅田）なるほど。そして2010年に引退ということになるわけですが。われわれは「おい、早いんじゃないの、矢野さん」とみんなが言ったわけですが、やはりそれはご自身で判断されたことですものね。

（矢野）いや、年俸もある程度頂いていましたが、自分の立場もありますし、小さなプライドもありますし、城島ショックもありましたし、まあいろいろなことがありまして。

（梅田）本音で言うでしょう。何でも本音です。

（矢野）最後は本当にひじが全然駄目だったのです。今は、辞めてゴルフをやるのですけれども。

（梅田）その割にはゴルフをいっぱいやっていますよね。

（矢野）ゴルフをやるときも、何か月かに１回は注射に行きながら。

（梅田）そうなのですか。

（矢野）やはりひじが、レギュラーとして出るには限界でしたね。

（梅田）なるほど。そして引退を決意し、引退セレモニーがあって、振り返ってみれば、ベストナインが２回、ゴールデングラブ賞が２回、オールスター出場が７回ということで、今は野球解説者を朝日放送でやっていらっしゃいます。

先ほど少し言いましたが、矢野さんは現役時代から社会貢献活動をやっていらっしゃいます。これは恐らく大学時代に植え付けられたそういう精神もあると思うのですが、阪神タイガースの選手としては初めて、甲子園に「矢野シート」というのを設けました。児童養護施設で暮らす子どもたちを招待されましてね。それで去年７月には大阪府社会福祉協議会に「39（サンキュー）矢野基金」、これは後ほど話をするのですが、筋ジストロフィーの患者、そして児童養護施設の子どもさんたちへの支援を継続的に実施される基金です。これは後ほど詳しく伺います。

それで今年３月には、矢野さんご自身が『考える虎』という本をお書きになりました。まさに考えるキャッチャー、名女房役が出した本。それで発売直前だったですね、あの震災が。

（矢野）そうです。

（梅田）ですからそれをきっかけに、印税すべてを被災地域の皆さんへの義援金として寄付されたわけですよね。もちろん思い出の地、東北ですよね。

（矢野）いやもう、仙台空港の地震の後の津波の映像が来まして、それを見たときは本当に信じられなかったですし、いつも大阪から行くときは仙台空港を使わせてもらっていたので、あの場所にこれだけの津波が来るのかというので本当にショックを受けました。残念ながら、先輩の奥さんや子どもさんが流されたということもありましたし、ショックは大きかったです。

（梅田）仙台の青葉区だったのですか、住んでいたのは。

（矢野）僕らが住んでいた所は青葉区で、結構山手なので津波というのは全然問題なかったのですけれども。

（梅田）あの瞬間、僕も家で、テレビ映像を見ながら叫んでいました。見る見る津波が飲んでいく姿、あんなものは見たことがなかったですね。

（矢野）本当に現実として受け止めるのに時間が掛かりますよね。映画ではないですけれども、何かうそではないかという感じで。初め地震があったときはあそこまでのことになるとは誰ももちろん想像できなかったので、あのようになってしまったのだと思いますけれども、映像を見ても信じられなかったですね。

（梅田）そうですね。３月11日でしょう。プロ野球開幕間近ですよ。僕は正直言って、今年はひょっとしたら無理なのかと思いました。どうでした？

（矢野）野球界もいろいろな方がかかわって生活されています。球場でお弁当を売られたり、球場でお店を出店されたり、そういう人の生活も懸かっているので一概には言えないですけれども、でも、オーナー側や球団側がそのまま開幕するという無茶を言いまして、それはないだろうと思ったのです。僕らプロスポーツというのはやはりファンの人に見ていただいて、応援していただいて初めて成り立つスポーツです。そういうところでは、これだけ震災があったときに、普通に開幕する、しかもどこもみんな節電するというときに、ナイターで照明をつけてなどはちょっとね。昼間にやるにしても、皆さんが見にこられない時間にやるなどというのは、そんなことやって何の意

味があるのかと思っていたのですけれども、タイガースの新井会長をはじめ選手会が結構頑張りまして、最低限ここでスタートすることでファンの方にご理解いただけるというところまで行けたのは、本当に選手会がよく頑張ってくれたと思います。

（梅田）そうですね。本当に新井選手会長がよく頑張ったなと思います。それで４月12日に開幕して、結果的には中日ドラゴンズとソフトバンクホークスでの日本シリーズになりましたが、１シーズンを振り返ってみてどうですか。

（矢野）みんなの胸の中にも震災に対する思いももちろんあったでしょうし、楽天の嶋選手会長などの話もありましたし、最後は秋山監督が、震災のみんなの気持ちをということをおっしゃっていたので、やはりそういう気持ちでみんな戦っていたと思います。野球界はもちろん、他のスポーツももちろんそうですし、みんながいろいろな意味で震災のことを考えてやれたものになったと思うので、使命ではないですけれども、最低限のものは果たせたのかなと思います。

（梅田）プロ野球はもちろん一生懸命やるのですが、震災に対する思いを１つにして野球をやったのは、プロ野球界始まって以来、本当に珍しいことですものね。

（矢野）でも、それくらいやっても、なかなか復興に対して何かできるというものではないのでしょうけれども、野球であれば梅田さんが言われたように、野球で精いっぱいやっているプレーを見せることしか本当にできないので、そういう気持ちをみんなしっかり出したのではないかと思います。

（梅田）その結果が順位ということなのですが。

（矢野）まあ、そうですね。

（梅田）すみませんが、阪神タイガースはどうでした？

（矢野）え、タイガース？　試合してました？

（梅田）「やはり矢野が抜けたらいけなかったのではないか」という声もあったり、いろいろするわけですけれども。

（矢野）それが一番大きな敗因でしたね。でも僕も外から見る側の立場になって、本当に４位でよかったなと思います。それは４位になったからということもあるのですけれども、やはりここ何年かのタイガースというのは、僕が中にいても、今回、外にいても、やはり熱のような、熱さのようなものが足りないなと思っていたのです。そういうところでは、３位になって、クライマックスでもし勝って日本シリーズに行ってしまったら、「これでいいのだ」と思うではないですか。そういう意味では、クライマックスに行けない４位で、もう１回自分たちを見つめ直して、結果監督も替わることになりましたし、いろいろな意味でチームが変わろうという方向になったので。そういう意味では中途半端に３位などで「クライマックスに行けたからよかった」と思うよりは、４位でよかったのではないかと思います。

（梅田）なるほどね。新しい「和田丸」という船がもうこぎ出していまして、僕も安芸に行ったし、矢野さんも安芸に取材に行かれましたが、どうでしたか。僕は非常に元気だなと思いましたけれども。

（矢野）そうですね。活気もありましたし。和田監督もそうですし、片岡コーチもすごく元気がありましたし。その中で、若い選手も大きな声を出して長い時間やっているというのを見てきましたから、来年の春にまたそういうものが見られるだろうなという期待はやはり膨らみましたね。

（梅田）和田新監督がどんな野球を見せてくれるのか、本当に楽しみです。しかも、震災の話は今年で終わったわけではなくて、子どもたちの顔を見たときに、やはり夢のある、感動できることを大人たちがしてあげる、それを見せてあげることは大事でしたね。

（矢野）そうですね。

（梅田）気仙沼に行ったのですよね。

（矢野）はい、僕も番組で行かせていただいたのですけれども、行く前は「テレビカメラを連れて、どの面下げて行くのか」と思いました。僕が逆の立場なら「おまえは何しに来たのか」と言われるのではないかという怖さもありつつ、被災地の方に行かせていただいたのですけれども、僕のそういう怖さはすぐ、少年野球の取材をさせてもらって、その子どもたちの元気な声を聞いたときに、もうそんなことは忘れていました。みんなも野球をやっている瞬間、そして親御さんも、子どもたちが野球をやっている姿を見ているときだけが唯一震災を忘れられる瞬間で、その空間だけは本当に震災のことがないのです。ただ、帰ったら皆さん被災されて、体育館でダンボールを敷いて寝泊まりされている現実が、すぐありますから。そういう意味では、そういうところの子どもの元気に本当に救われましたね。

（梅田）振り返ってみると17年前に、われわれは阪神淡路大震災を経験しています。あのときはオリックス・ブルーウェーブが仰木監督の下優勝して、本当に奇跡に近い優勝だった。だから神戸の人たちが沸きに沸いた。あれをふと思い出すと、やはりプロ野球の存在感というものを、今年見せつけられたのではないかと僕は思います。

（矢野）そうですね。もちろんこれでいいとは全然思わないのですけれども、野球だけに限らず、スポーツにはそういう力があると思うのです。野球界もそうですし、いろいろなものがもっと力を合わせてというか、被災された方々に何かできるようなことを、これからもやはりやっていくということが必要だと思います。

（梅田）また機会があればそれこそ東北に行って、子どもさんたちと触れ合うという時間もあるかもしれませんものね。

（矢野）はい。それはもう、使命ではないですけども、僕らに与えられたものだなと思うので、そういうことはもちろんしたいですね。

（梅田）ですね。10年、20年の仕事、いやもう50年の仕事になるかもしれませんが、われわれはそうして差しあげなければいけないですね。

（矢野）そうですね。

（梅田）そんな中『考える虎』という本をお出しになって、その印税を義援金として寄付されました。『考える虎』というのは、要するに矢野さんがキャッチャーとして経験してきたことをまとめ上げたバイブルですか。

（矢野）そうですね。野球をやり始めたころから振り返りながら、お世話になった監督方、星野監督だったり野村監督だったり岡田監督だったり、そういう方ごとにこういうことを勉強させていただいた、キャッチャーとしてどういう気持ちでやっていたなど、そういうことを書かせていただいている本です。

（梅田）なるほどね。皆さんもしよかったら、矢野さんの書かれた『考える虎』という本もぜひ読んでいただきたいと思います。いろいろな監督に仕えてきて、一番嫌だった監督は誰ですか。

（矢野）そうですね、それはもう間違いなく野村監督ですね。

（梅田）これは古田敦也さんも同じことを言うのです。ただ「嫌だったのだけど学んだことは大きかった」と言いますね。

（矢野）そうなのです。皆さんも横で毎日毎日ぼやかれたら、それは嫌ですよ。でも、でもなのですけれども、やはり野村監督の何がすごいかというと、そのぼやきがずばずば当たるのです。横で「フォークや」と言ったら、フォークが来るのです。「ランナーが走るぞ」と言うと、ランナーが走るのです。「何だ、この人は」と思うではないですか。それで興味がわいて。野村監督は非常にたくさんのアンテナを立てているのです。ピッチャーに何かあるのではないか、ランナーに何かあるのではないか、ランナーコーチは何かサインを出しているのではないかというアンテナがたくさん立っている

のです。同じようにピッチャーを見ているように周りから見たら見えるのですけれども、そこのアンテナの強さが違うというか。それで僕も興味が出てきて、「ピッチャーは何かないのかな」と思うようになったら、ピッチャーは癖がいろいろ出るのです。グラブが高く入った、グラブが開いた、そういうのでフォークだなと分かることがあったり、ランナーの体重の掛かり方やリードの仕方で何か分かったり、やっているときは非常にしんどかったのですけれども、野村監督の下でそういうことを勉強させてもらったおかげで、20年やることができましたし。

古田さんもおっしゃるように、やっていることはとても嫌なのですけれども、でもやはりそういう嫌なことというのは、年齢を重ねるとなかなか言ってくれる人も減ってくるではないですか。そういう意味では野村監督のようにそうやって言ってくださる方は貴重なのだなと思います。

（梅田）なるほど。小さく野球の話だけまとめるならば、もう既にスポーツ紙で「このオフにも矢野さんがまたユニホームを着るかも」という情報が流れて、われわれも「えっ、解説１年だけで？」と思ったのですが、そういう誘いは本当にあったのですか。

（矢野）はい？

（梅田）多分あったのでしょうね。やはり阪神タイガースは矢野さんの頭脳が欲しかったのだろうと思います。でも、いずれはまた再びユニホームを着たいということですね。

（矢野）そうですね。ユニホームを脱いだときから、いつかグラウンドに戻るための社会勉強というか、自分の勉強のためにユニホームを脱がせていただいたという気持ちはあります。今日もそうですが、いろいろな人にお会いさせていただいて、将来グラウンドに戻るときに、「野球馬鹿」だけではなくて、少しは社会のことも知っておきたい。最近では携帯電話で新幹線のチケットも取れるようになりましたから。今まではマネージャーが用意してくれていて、チケットを入れるだけだったのですけれども、そういうこともできるようになりました。小さなことなのですが、そういうのをもっとユ

ニホームを脱いだら勉強して、グラウンドに戻ったときに少しでも視野が広がったり、教えるときに自分でプラスになったなという時間にしたいと思っています。

（梅田）こういう考え方を持つこと自体が素晴らしいなと僕は思うのです。長島一茂さんも現役を辞めた後、地下鉄で切符を買うのに１万円札が入らないというので随分苦労したという話を聞いたことがあります。要するに「野球馬鹿」という言葉があるのですけれども、逆に学んでいろいろなことを覚えないといけないくらい、野球に夢中になっているわけですからね。

（矢野）そうですね。僕も小学校２年からですから、野球しか本当にやっていないので。特にプロに入ってからは、ホテルに行けば「矢野です」と言ったらキーが出てきて。どうやって取るのかなどということは分からないのです。そういう意味では、本当に良くないところでもあるのですけれども。本当一つひとつ勉強になりますね。

（梅田）そうですか。ゴルフも随分勉強なさっていますし。

（矢野）いえいえ。ゴルフは楽しいですね。

（梅田）でも本当に再びユニホームを着て「矢野監督」が実現した場合には、われわれはまた再び応援していきたいなと、そのように皆さんお考えですよね（拍手）。どうもありがとうございます。

（矢野）ありがとうございます。

（梅田）これが「あうんの呼吸」というやつで。

（矢野）ありがとうございます。

（梅田）ただ「名監督には強烈な奥さんあり」ということで、サッチーや信子夫人のような方もいらっしゃいますけれども。

（矢野）濃いですよね。

（梅田）矢野家の奥さまはそうではありませんよね。

（矢野）そうですね、うちの嫁さんはあまり前には出ない感じなので、名監督にはなれないかもしれない。

（梅田）いやいや何をおっしゃいます。それは全く関係なくて。家族をこよなく愛して、チワワを２匹飼いながらという、楽しい人生を送っていらっしゃる矢野さんです。

さあ、ここで一つご案内したいことがあって、ちょっと聞いていただきたいのです。大阪府社会福祉協議会の取り組みがありまして、これは矢野さんも間接的にご存じかと思いますが、震災が発生して、その直後から８月末までですか、近畿圏内の社会福祉協議会からは1,500人以上の方が宮城県に派遣されて、大阪府内の社会福祉協議会からは161名が派遣されたのです。僕も実はラジオの番組で、吹田市の社会福祉協議会の方がバスを出して向こうで動かれた際に生中継をしたのですけれども、本当に皆さんが気持ちを一つにして被災地に向かった、社会福祉協議会の果たす役割は大きいですよね。

（矢野）それはもう、なくてはならないですよね。

（梅田）はい。今回の社会福祉大会は、大阪府内の保育所から園児が書いた絵画がたくさん展示されていまして、これらの絵は後日被災地に届けられます。お帰りの際に見ていただければと思います。皆さんも今日はいろいろなことを楽しみにして、次は何ができるのかということを考えながら参加なさっていると思うのです。矢野さんは背番号39です。これは良かったですね、「サンキュー」という本当に文字にしやすい番号でしたね。

（矢野）そうですね、本当に一番。僕が入ったとき中日では２番で、次が38で、タイガースに来たとき「自分で選んでいいよ」と言われた中に39番があったのです。それで38のときの自分よりも一つでも上に行きたいということで、たまたま39を選んだのですが、とても好きな番号になりました。

（梅田）それが今、「39（サンキュー）矢野基金」につながるというのがね。

（矢野）そうですね。その名前を考えさせていただくときに「39」というのがすぐ浮かんで、そして基金に協力していただく方、いろいろな方にお世話になるので、そういう中で皆さんにも39とサンキュー（ありがとうございます）を掛けて「サンキュー」を入れさせていただいたのです。

（梅田）はい。ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、ここで再び振り返っておきたいと思います。「39（サンキュー）矢野基金」とは、筋ジストロフィーの患者さんへ車いすを贈っていただくことと、児童養護施設で暮らす子どもたちへの支援ということで、去年の７月、大阪府社会福祉協議会の皆さんとともに設立されたのですが、そのきっかけは何だったのですか。

（矢野）2003年に18年ぶりの優勝で、関西と言わずいろいろなところが沸いて、大変な盛り上がりがあったのですが、そのときにパレードを大阪と神戸でやらせていただいたのです。そのとき、やる前は雨が降っていまして、正直「やるのは嫌だな、パレードは面倒くさいな」という思いがあったのです。でも実際やったら、道という道が人だらけで、ビルからは皆さん手を振ってくれて「ありがとう」と言ってくれて。

（梅田）向こうはまさに「サンキュー」ですよね。

（矢野）そうですね。それでパレードをしたときに、優勝とはこんなにいいものかと、僕は一番感動したのです。そのパレードで雨が降っていたときに、車いすに乗って、多分僕に手を振ってくれている写真があると思うのですが、僕の39番のユニホームを着た倉野君という子がこの病気と闘っていて、その子から手紙を頂いたのです。僕にどうしても会いたいというファンレターと、そのときの写真を頂きました。そのメッセージが強いものだったので、僕もいつか会いに行きたいなという思いでロッカーの横にマグネットで写真と手紙を貼っていたのです。

それが2003年で、2004年のシーズンになってキャンプに行ったのですが、僕はふくらはぎの肉離れを起こしたのです。オープン戦というのは地方を

転々として結構忙しい時期なのですが、僕はそのときリハビリで時間があったので、球団の方に連絡を取ってもらって、大阪の刀根山という所に学校と病院が隣接している所があるのですが、そこに倉野君や筋ジストロフィーで闘っている皆さんがおられるということで、そこに行ったのです。

こういう体育館のような所で、野球盤って昔ありましたよね。それをダンボールで作ってくれて、「２塁アウト」「ホームラン」などと書いてくれて、僕がピン球を転がして、彼らが木製のホッケー型のバットで打つのです、打つというよりは当てるくらいの感じなのですけれども、「２塁打だったな」「アウトだったな」と言いながら、あとは半日くらい一緒に時間を過ごしました。

その帰りに先生方や病気と闘っているみんなから「こういう病気と闘っている僕たちをもっと知ってほしい」と言われたのです。そのとき僕は球団の広報から「矢野さんが訪問するというと、新聞やメディアが来たいと言うと思うのですが、どうしましょうか」と言うので、僕は「全部断ってくれ」と言ったのです。「そういうのを表に出すつもりはないし、倉野君や周りにいる子どもが少しでも元気になってくれたらおれはうれしいから」ということで断ったのです。

でも、「この病気と闘っている僕たちのことをもっと知ってほしい」と言われたときに、僕は非常にショックというか、自分の人間の小ささを思い知らされました。それはメディアに出ることで「おまえは何を格好つけているのか」「おまえは何をいいことをしようとしているのか」と思われるのが嫌だったのです。「おれはそうではない、おれは倉野君と行ったところのみんなを元気付けられたらいいのだ」というところだけで行きたかったのですけれども、「こういう病気と闘っていることを知ってほしい」と言われたときに、おれは人間が小さいなと思ったのです。自分のそんなことを気にしてそういうことを考えていたことが恥ずかしくなって、そこから何かしたいなと思って考えていたのです。

それで、倉野君の検査入院している病院に行ったとき、ぽろっと車いすの話をされたのです。国の援助などもあるのですが、やはり進行していって体が変形していく方ももちろんいますし、そういう中では体に合っていない車いすに乗られている方が非常に多いということだったのです。１台平均50万円、高いものでは100万円くらいしますから、その負担はかなり大きいの

で、これなら何かできないかと思ったのです。それで、一緒にテレビ局の方がいたのですが、「少し調べてくれないか」といろいろ調べてもらったら、「こういうことができるのではないですか」ということになって、それが、筋ジストロフィーの患者さんたちの電動車いすを贈らせていただくということと、児童養護施設の子どもたちに何かできないかというきっかけになっているのです。

（梅田）先ほど少し言われた「マスコミを使った売名的ではないものを何か目指したかった」、それが非常に僕は理解できるのです。ただそうではなくて、筋ジストロフィーを持った倉野さんをはじめみんなの声を「やはり広めなければいけない」という。

（矢野）そうですね。僕もプロ野球という世界で皆さんから応援していただいて、やはり社会に何か恩返しではないですけれども、応援していただいてパワーをいっぱいもらいましたから。今、関西で、「阪神の矢野」ということを少しは知っていただける立場になったので、僕が少しでも先頭に立って、そういう方々に何か勇気を与えたり元気を与えたりということができればいいなということです。だから先ほど言ったように、何か格好つけている、いいことをしようと思っていると思われる方も絶対いると思うのです。でもそれをもう僕は乗り越えられたので、そんなことよりも何か貢献できる、１台でも多く車いすを困っている方に贈れるように頑張りたいのです。本当に今回出会ったみんなのおかげで、そういうことはもう思わなくなりましたね。

（梅田）それを乗り越えられたのが大きいですね。

（矢野）そうですね。

（梅田）そういう気持ちがね。それからずっとお付き合いがあって、倉野さんはお幾つくらいでしたかね。

（矢野）倉野君はもう二十歳を超えました。

（梅田）そうですか。長い人生を本当に車いすとともに、いわば車いすが相棒ということになりますよね。

（矢野）そうですね。はい。

（梅田）先ほど僕も少し聞きましたが、50万円を超えるものから100万円を超えるものまで、それは個人の病状によって変わるわけですよね。

（矢野）そうですね。そして先ほど言ったように、体に合わない方がとても多いようですし、メンテナンスも非常に大変なようです。バッテリーも充電式というよりはずっと減っていくようなバッテリーですから、換えないと駄目なのです。今回、川村義肢さんという会社にお願いしているのですが、その会社にも訪問させていただいて、快くメンテナンスにかかわるサポートも頂くことになりました。もちろん非常にお金が掛かるので、全部ではないのですが、サポートしていただけるという約束もしていただきまして、本当に皆さんのお力を借りて何とかやっているという感じです。

（梅田）川村義肢さんというのは車いすメーカーなのですが、ちょうど僕は１年前に矢野さんとトークショーをやっているときに倉野さんが来てくださって、あのときに故障や、ここが擦り減ったという、それをどういう形で保証してあげられるかなという話をしていたのを僕は思い出したのです。

（矢野）そうですね。僕らが贈呈したものに対して国からの援助というのはないのです。それは全額個人負担になるので、贈ったはいいけれども、メンテナンスの負担も掛かるのであれば非常に難しい問題になるのですが、そこを川村義肢さんにお手伝いしていただけるということで、本当に助かっていますね。

（梅田）川村義肢さんが贈ってくださったこのサービスなのですが、「39（サンキュー）矢野基金安心サポートサービス」というものをご提案いただいて、車いす５年間のメンテナンスの保証と、５万円分のクーポンを付けてサービスをしていただけたという。

（矢野）もう本当にありがたいです。

（梅田）やはり人の心は探っていくと深みがあって、少し無理をお願いしてもそれを聞いてくださる方がいらっしゃるのだなということですよね。

（矢野）そうですね。行ってすぐそういうことをおっしゃってくださったので、非常に助かりました。基金に協力していただいている方にも、私たち一般人がやろうとしてもなかなかできないかもしれないけれども、僕も一般人なのですけれども、一応プロ野球選手だったということで、先頭に立つことで、それについていける、一緒に応援できるということでありがとうございますということを言っていただくこともあるので、本当にいろいろな方に支えられてやれているのだなと思いますね。

（梅田）そうですね。少し振り返って「矢野シート」の話だけ伺っておきたかったのですが、「矢野シート」を設定したのは何年ですか。

（矢野）あれは2001年くらいですかね。FAでちょうど３年か４年の契約をしていただいたのです。給料がある程度になったらそういう形で呼びたいなと思っていたのですが、FAで契約したとき「よし、やろう」と思ったのが、多分2001年くらいです。

（梅田）星野さんが来たのが2002年ですから、2001年ですね。そこからずっと続けていらっしゃったのですよね。

（矢野）そうですね。たまたま僕が一番最初で、タイガースはそれまでやっていなかったのですが、今ではやっていない選手はいないのではないかというくらい、タイガースの選手も、いろいろな形で、球場に招待するなどしています。赤星選手が非常に有名ですけれども、車いすを贈ったり、岩田選手も糖尿病について、自分がそうだったということもあって、やっていますし。もう本当にいろいろなところで社会に恩返しというところは、選手も結構出ていますね。

（梅田）だから、野球選手自体の考え方もやはり少しずつ変わってきたなという感じを僕はしていますが、その先駆的な役割だったわけです。先ほどの倉野さんの話は分かったのですが、「矢野シート」はやはり現役時代から「やってみよう」という考えがあったわけですね。

（矢野）そうですね。中日時代、僕はレギュラーでも何でもなかったのですけれども、児童養護施設に友達がいまして、「ちょっと矢野、顔を出してくれ」と言われて、「レギュラーではないし、おれのことなんて分からないのではないか」と言って行ったのです。初めはやはり距離感が非常にあるのですけれども、仲良くなったら最後はしがみついて離れないくらいになりました。

（梅田）なるほどね。

（矢野）おれでもこんなに思ってくれるのかと感じてしまって、これは頑張って、将来、何かの事情で親御さんなどと一緒に住めない子をグラウンドに招待したいなというのは、そのときからずっと思っていたのです。そういうのがきっかけとしてあります。

（梅田）なるほど。「もし野球選手になっていなかったら」と考えたことはありますか。プロ野球以外に何か夢見ていたことはありますか。

（矢野）体育の先生になりたかったですね。

（梅田）体育の先生もやはり子どもたちを育て上げて、ボランティア的な精神がないとできないのですけれども、それよりもっと具体的にボランティアができたわけですね。

（矢野）そうですね。本当にこれは縁ですけれども、赤星選手などは震災があってACのコマーシャルがたくさん流れて、「元気付けるつもりが元気をもらいました」というのを何回も繰り返していましたが、皆さんもそうだと思うのです。本当に僕も倉野君に会ったりみんなを元気付けたいと思うのですが、行ったら逆にまた元気をもらうのです。だから本当にお互いがそうい

う、いいパワーを与えたりもらったりしながらやっていけるというものなのだなというのは、やっていて本当にそう感じますね。

（梅田）そういう精神をやはり今の政治家にも学んでほしいですね。

（矢野）そうですね。僕が政治家になることは100％ないですけれども、本当に僕のできる範囲で。だから今回も倉野君がたまたま大阪に居たということで、現段階では大阪と場所を決めさせていただいているのです。近畿に広げるというのも、僕の力でそこまでできるものでもないですし、皆さんの大切なお金を預かる立場としては、自分の管理できる範囲でやりたいと思っています。募金箱をいろいろな所に置いていただくという話もないことはないのですけれども、僕が目の届かない、お金の管理できないものよりは、できる範囲の中できちんと皆さんに誠実に、「このようにやれているのです」と言える範囲ということで、今、大阪に限定しているのです。

そういうのは自然に広まればすごくいいなと思うのです。あまり大きなことはできないのですが、本当に自分の範囲というか、やれることをしっかりクリアにやりたいなと思っています。

（梅田）先ほど政治家の話をしましたが、それを見た政治を司る方々が、国のシステムとして何かしてあげられないかということに気付いていただくとありがたいですね。

（矢野）そうですね。だから、川村義肢さんのところに行かせていただいたときも、国から贈られたものには修理などの援助もあると聞いたのですけれども、僕らが基金として贈らせていただく分には出ないというのはおかしいですよね、普通に考えて。

（梅田）ですよね。

（矢野）そこもサポートしてくれよと思うのですが、僕らはもちろんそこまでの力はないですから、それはやはり政治家の方たちにそういうところに目を向けていただいて、「それは違うだろう」ということで、そういう方にサ

ポートしていけるような体制を作っていただきたいと思うのです。僕もそういうところに働き掛けるようなものができていけばいいのでしょうが。でもそういうことも、川村義肢さんのところに行かせていただいた際に初めて教えていただいて、「そういうことなのか」というのを聞いて、本当にいろいろなことで勉強になりました。もちろんやれることはまだまだあるのでしょうが、足元を見つめながらやっていきたいと思います。

（梅田）今日は一般の方も社会福祉協議会の方もいらっしゃいますが、今日これをもって、「矢野さんはこんなことをしているのだよ」というのを近所近辺の皆さんにもお話しいただけると、また活動として活気がわくといいますか。

（矢野）そうですね。やはり知っていただくということがまずは大事だと思います。

（梅田）そういうことですね。知っていただくということで話をしますと、パソコンを扱う方はご存じと思いますが、今Yahoo！でインターネット募金というのも実施なさっているということですね。

（矢野）そうですね。皆さんもいろいろご存じだと思うのですが、インターネットで、Yahoo！の１ポイントが１円に換金されるのですが、１円から無駄なく募金できるのです。電話などでは、100円入れていただいても100円全部が基金に回せないという話を聞きまして、「それなら１円でも入れてあげよう」という人が使えるということで、インターネットになったのです。僕もパソコンは得意ではないので、なかなかそこに入っていくこと自体も難しいところはあるのですが、まずパソコンの壁紙を買っていただくという形でお願いしているという感じです。

（梅田）それ以外にも、阪神タイガースの現役選手からもさまざまな品物を頂いているということですね。例えば金本選手がバット、下柳選手もキャップをということがあったのですが、これもやはり選手たちの気持ちがうれしいですね。

（矢野）そうですね、もちろんみんな本当に快く協力してくれていますし、選手が使った本物の、汗水が入っているような道具なので、落札された方にも喜んでいただけると思います。それが全額また寄付という形でやらせていただいているので、本当に選手の気持ちはありがたいです。

（梅田）あと矢野選手が現役時代に使っていた言葉で、「必死のパッチ」というのを、関本選手が若干まねしたような形でやっていましたが。

（矢野）若干というか、完全にまねしていますね。

（梅田）あれは本当は矢野選手が最初に言った「必死のパッチ」だったのですが。その気持ちで野球に取り組んだその言葉が、実はお寿司になって。

（矢野）そうですね。

（梅田）「あきんどスシロー」というのをご存じかと思います。回転寿司です。大変に人気があって、大きな規模で全国展開なさっていますが、あの社長が矢野さんのファンだったのですか？

（矢野）ファンではないし、間に入ってくださっている方がもちろんいるのですけれども、僕がこの基金をしているということで、快く了承してくださいまして、「それでは何かやろう」ということで、「必死のパッチ巻き」というものを作りまして。

（梅田）巻き寿司で「必死のパッチ巻き」という商品を作ったのです。

（矢野）売上の一部をその基金の方に回させていただいて。あとは近畿圏、四国もあったのですけれども、募金箱を置いていただいて、そこで総額200万円くらい「あきんどスシロー」さんから協力していただきましたし、僕の周りの企業の社長さんなど、いろいろな方にもこの基金に協力していただいて、本当にたくさんの方とのつながりでできています。

（梅田）矢野さん自身のオリジナルの品物を何か作ったらと僕も思ってはいたのですが、オリジナルネクタイを作られたそうですね。

（矢野）はい。第１段はネクタイで、その売上をということでやらせていただいたのですけれども、今後また何か違う形でできればいいなと思っています。

（梅田）そうですね。これはいろいろアイデア次第で広がるものだと思いますので。10月末現在、これまで集めていただいた皆さんから寄せられた基金の総額が、1,201万3,122円。これは大変な金額ですね。

（矢野）本当にもう、去年も12台、500万円以上だったのですけれども、今年はもっと協力していただきまして、皆さんの気持ちにますます誠実に応えていかないといけないと思っています。

（梅田）そうですよね。今年の暑い夏には子どもたちのソフトボール大会があって、そこにも参加されたり、年間を数えればそういうイベントはそこかしこでやっているのですよね。

（矢野）そうですね。そのソフトボール大会は、子どもが優勝してもメダルもないというところの話から、メダルを贈らせていただくようになりました。

（梅田）そんなことがあって、去年のこの社会福祉大会では車いすの贈呈式を行っています。矢野さんは先ほど言われたように、最初のきっかけを作ったときのマスコミの話は、実は今も心の中にあって、そんなにど派手に、どこに行くから取材に来てくれなどという気は別にさらさらないわけですよね。

（矢野）まあ、ないですね。

（梅田）逆に、わずらわしさのようなものがあるわけでしょう。要するに取材などというのは二の次であって。

（矢野）そうですね。でも今はもう、もちろん取材で来ていただけるとなれ

ば、喜んでやってもらおうと思いますし、困っている筋ジストロフィーと闘っている方たちのことだったり、児童養護施設の子どもたちのことだったり、そういうことを何か、アピールではないのですけれども、どんどん報道してもらえればいいなと思うのです。心のどこかに「格好つけたいな」という自分も絶対いるとは思うのですけれども、そんなことよりもやはり基金に協力できることをやりたいという気持ちです。

（梅田）なるほど。その現実を見たからこそ、倉野さんとの出会いがあったからこそ、実現していることなのですよね。実は今日は一つメッセージが届いていまして、ある映像を皆さんにもご覧いただきたいと思います。ちょっと準備をお願いできますか。

本当にたくさんの皆さんが今日こうして集まられて、全国に社会福祉協議会はあるのです。社会福祉を志す方も数々いらっしゃると思うのですが、具体的に何をするのが一番かと考えておられると思います。こんな時代になってきまして、本当に心がすさんだような状態の方もあるし、国自体があまりいい方向に向かっていないという気がしているので、何か小さなことをきっかけに逆転していって、やはり日本が明るく素晴らしい国になってほしいと思いますね。

（矢野）そうですね。でも震災のことで義援金もすごかったですし、ボランティアの方が行かれる数も本当に大変なものでしたね。

（梅田）捨てたものではないという。それはありましたね。

（矢野）皆さんの気持ちが出たような気がしますよね。

（梅田）そうですね。まあ長い闘いになるわけですが。

さて、今からご覧いただく女の子も、実は病いと闘いながらこんなメッセージを頂いています。それではどうぞ、ご覧いただきたいと思います。「39（サンキュー）矢野基金」で、当時９歳のわかなちゃんがDVDを送ってくれました。

○ビデオ上演

（梅田） これは３月24日に、訓練施設で車いすの仮合わせというものがあるのですが、矢野さん、車いすはその子その子に合わせた作り方をしなければならないのですよね。

（矢野） はい、全部オーダーメードで作っています。

（梅田） だから、まずこれは木枠でもって高さ、広さ、大きさといったものを調整するのです。それでやっと仮の車いすができて少し動かしてみようということで、これは中央に持っているのがリモコンなのですね。

（矢野） そうです、レバーで。

（梅田） そのレバーで自分で操作をしながら動かそうとしています。まだ慣れていない部分もあるので、少しおっかなびっくりでわかなちゃんがやっています。でもやはり何となくうれしそうな表情ですよね。

（矢野） やはり自分で動けるというのが、とてもうれしいのだと思います。

（梅田） そうですよね。それで走行テストも行っています。ですから川村義肢さんに頑張って、いろいろなアイデアでもって作っていただいているのですが、きちんとテストを何度も繰り返しながらやらないといけないのですね。

（矢野） そうですね。

（梅田） まあ技術の力というものが、本当にこれは役立てられているわけですよね。周りからちょっと注目をされまして、少し照れくさそうな顔をしています。あっ、できましたね。これで完成ですね。

（矢野） そうですね。

（梅田）わかなちゃんはこの色を選んだのですかね。ブルーの枠があります。「撮影会みたいやな」などと言っています。でも良かった、真っ赤な背板というかバックがあって、赤とブルーで。これで散歩にも行けるし、自由に動けるなと。

「本当にありがとうございました」というわかなちゃんの言葉でした。皆さんいかがでしたか（拍手）。

実はわかなちゃんのお母さんからお手紙を頂いています。

「このたびは大変高価な品物をご贈呈いただき、ありがとうございました。何だかいまだに夢を見ているような気持ちです。先日デモ機に試乗した娘わかなは、最初はこわごわ操作レバーを触っていました。ところがすぐに要領をつかんで、今まで見たことのない笑顔で、前へ後ろへと車いすを走らせていました。あらためて矢野さんへの感謝の気持ちでいっぱいです」ということです。

少し補足をしておきますが、わかなちゃんはDVDでメッセージをくれた９歳の女の子ですが、実は日本では、安全性の面から、年少者の電動式車いすは推奨されていないのだそうです。福祉関連法でも、福祉機器購入の補助対象外だそうなのです。これは厳しいところですよね。

（矢野）そうですね。

（梅田）禁止ではないのです。ですから、電動式車いすの購入は自己責任において認められているという形になるのです。ところが高額な電動式車いすを補助なしで購入することは難しくて、手押し式の車いすに甘んじなければならない現状もあるのですね。なお先進諸外国の中には既に、年少者にも電動式車いすの補助が認められている国もあるということですが、日本ではなかなか理解が及んでいない部分があるということです。そんな中、基金を活用して年少者にも安全な電動式車いすを川村義肢さんに作っていただいて、ご家族ともども大変喜んでおられるということです。やはり法の壁が立ちはだかる部分が大きくて、これを何とかクリアしてもらいたいなと思いますね。

（矢野）そうですね。だから本当に、今回のわかなちゃんから、僕は違う

DVDを頂いたのですけども、やはり自分で動けるというのがすごく楽しいようで、その周りにいる友達が「わかなちゃん、右も行けるし左にも行けるし、回れるし、すごいやん」と非常に応援してくれている映像を見せていただいたのです。もちろん自動で動くものですから、事故もありますし、その危険性ももちろんあるのですけれども、やはりこういうわかなちゃんのような若い方に、この年から電動式の車いすを贈れることで、積極的な気持ち、どこかに行ってみよう、何かやってみようという、そういう気持ちがわくことにつながっていくと思うのです。危険なところももちろんあるので簡単には言えないのですけれども、もっと積極的な気持ちになっていただくというところで、若い方、希望のある方にはどんどん贈っていけたらなと思うのです。

（梅田）そうですね。「一歩前へ踏み出す」という言葉がありますが、まさにそれを９歳で実現できれば、また世界が広がりますものね。

（矢野）そうですね。

（梅田）さてもう一方、お手紙をちょうだいしています。68歳の女性です。

「このたびは本当にありがとうございます。車いす贈呈の内定連絡を頂いたとき、うれしさのあまりびっくりして、声も上ずりながら家族に報告していました。車いすメーカーの川村義肢様からは、私にぴったりの車いすを探していただきました。この車いすに乗って、あれもしてみたい、これもしてみたいと頭を巡らせています。車いすが変われば、私たちの生活も大きく変わります。夢が生まれます。生きがいを感じます。しかし、車いすだけに頼るのではなく、自分の症状が進行するのを防ぐため、少しでも動いてと頑張っています。うれしいことがあると力もわいてきます」。

68歳の女性、いやあ、立派に生きていらっしゃいますよね。

（矢野）本当にうれしいですね。本当に皆さんの力で贈らせていただいたものですから、そういうものがこのように形にしっかりできているというのは、本当にうれしいですね。

（梅田）これからもいろいろな活動をされていく中で、まずもって今年また患者さんに車いすを贈呈するということですね。これは実は車いすの寄贈先をインターネットなどで一般公募するという形を取っているのですよね。

（矢野）はい。

（梅田）それで10名の患者さんから応募があったということです。近く運営委員会というものを開催して、贈呈する方を決定したいと考えていらっしゃるのですね。

（矢野）そうです。

（梅田）そういう形でまた喜びにあふれる方々が生まれるというのは、われわれもうれしいのですが。それからもう一つ、インターネットのチャリティーオークションもまたやるのですね。

（矢野）はい、シーズンも終わりましたし、金本選手や下柳選手には１回目のときに協力していただきましたので、今回はそのほかの選手に協力をお願いしたところ、本当にたくさんのお宝グッズを預かってきましたので、それをまたオークションに出品させていただきたいと思います。

（梅田）これはご来場いただいた阪神タイガースファンの皆さんも楽しみにしていただいて、11月28日から再び、11選手によりますオークションを行います。これは期間を３回に分けて出していきますが、Yahoo！オークションをぜひチェックしていただきたいと思います。

（矢野）そうですね。お宝のものですし、本当に電動車いすや児童養護施設の子どもたちに直接全額行くので、ぜひとも皆さんにご協力をお願いしたいですね。

（梅田）そうですね。さあ話をいろいろ進めてくる中で、皆さんも新たに思ったこと、それから矢野さんに対していろいろな感想をお持ちになったと

思うのです。お幾つになられました？

（矢野）42歳、12月で43歳です。

（梅田）人生はもちろんこれからまだまだ長いわけですが、一つやはり大きな出来事に出会って、貢献する喜びも感じていらっしゃるでしょうし、そして喜んでくれる顔を見るのが一番うれしい。

（矢野）そうですね。本当にそれが一番ですね。

（梅田）これから先、矢野さん自身が考えていくことは何でしょう。

（矢野）そうですね、これから本当に大きなことがもうできるとは思っていませんし、先ほど言ったことと重なるのですが、自分のできる範囲で本当に100％クリアにして、こつこつとやらせていただくというのがこれからの目標です。今年は本当にたくさんの方に協力していただいて、去年は500万円以上、今年は1,200万円以上集まりましたから、できる範囲というところで大阪に限定していたのですけれども、今度またその話し合いもするのですが、もっとできるだろうということであれば、また皆さんと相談して、違うところで、電動車いすになるのか児童養護施設の子どもたちになるのかわかりませんが、何かそういう形でこつこつとできる範囲のことをしっかりやっていきたいなということを、これからも変えずにやっていきたいです。

（梅田）そうですね。われわれもそれを切に願いたいと思います。今日は２人とも胸に赤い羽根を付けさせていただきましたが、この時期になってね、この赤い羽根。やはりみんなが幸せになるように、笑顔に包まれるような国になるようにね、一人ひとりがやはり自分のことだけではなくて、誰かのことを考える、そんな国にならなければいけませんね。

（矢野）この前はブータン国王なんてね。あの方たちは本当に幸せなオーラというか、雰囲気を持ってきてくださいましたからね。日本もそのように近付ければいいですよね。

（梅田）そうですね。やがて大阪府がまた幸せに歩めるかどうか、11月27日にまた一つの結論が下されるわけですが、そんな中、大阪を中心に、「これからも広がりを見せたい」とあえておっしゃいました。それでわれわれが期待するのは、そのこととともう一つ、再びユニホームを着る矢野監督でしょう。僕はそれを期待します。その矢野監督が聖地甲子園で胴上げをされるということを夢見たいし、そのときは僕が実況をしたいなと思っています。「矢野監督が胴上げをされています」というね、そんな日を夢見させてくださいよ。

（矢野）しっかり勉強しておきます。

（梅田）今日は短い時間だったのですが、またこういう機会があれば、矢野さんはどこでもお話をしてくれると思います。街で出会ったら、気軽に声を掛けていいですか？

（矢野）はい。大阪の方々はお相撲さんのように体をたたいてくれますから、それくらいは全然問題はありませんので、見掛けたときはぱちぱちとたたいてもらって、「頑張ってね」と声を掛けてください。僕も「頑張ります」というあいさつをしたいと思います。

（梅田）そうですか。ありがとうございます。本当に身近なお話をしてくれました、矢野さんにもう一度大きな拍手をお願いしたいと思います。

（矢野）ありがとうございます。

（梅田）これからも頑張ってください。ありがとうございました。

（矢野）ありがとうございました。